

# 万葉紀行(下)



〈机島〉

和倉には和倉港という小さな港があります。  
 和倉港にはプレジャーボートやヨットが並び、観光用の釣船や遊覧船が観光客などに楽しまれています。  
 港の堤防から眺めると眼前に、紺碧の七尾湾と蒼く広がる秋空、緑豊かな能登島のコントラストが広がります。  
 鳥総とらふさ立て 船木ふなき伐るといふ  
 能登の島山 今日見れば  
 木立繁しも 幾代かむ神かむびそ  
 (『万葉集』卷十七 四〇二六)

と、家持が詠んだ島山の姿はこれでは、と思わせる“神々しい”姿を眺めることができます。



〈「歌碑」机島〉

和倉の湯にひたり、疲れを癒した後、あらためて和倉埠頭から熊来に向け船を出しました。  
 港を出て楫を左にとると、正面に瀬風の小石鼻と、その先端にまるで岬のように続く二つの島の姿が見えます。  
 奥の島が種ヶ島、手前にある平た小さい島が机島です。  
 七尾西湾の水面すれすれに浮かぶ机島は、島をはみ出すように枝をのぼした背の高い松林と草に覆われ湾と空の色に映える美しい景観は、市指定文化財「名勝」に指定されています。  
 机島は万葉集の「能登国歌三首」のひとつに“机の島”として詠まれた場所だといわれています。

香島嶺かしまねの 机の島の  
 小螺したたみを い拾ひ持ち来て  
 石もち つつき破り  
 早川からしおに 洗い濯すすぎ  
 辛塩からしおに ここと揉もみ  
 高杯たかづきに盛り 机かに立てて  
 母ははに奉まりつや 愛あづこの刀と自じ  
 父ちちに奉まりつや 愛あづこの刀と自じ  
 (『万葉集』卷十六 三八八〇)

机島の大きな松の根元には、くぼみがある大石があり、「硯石」と呼ばれています。  
 硯石には、弘法大師がたまり水で歌を書いたという言い伝えがあり、くぼみのたまり水は干天でも水が絶えないといわれています。  
 机島に船を着け、万葉の歌に詠まれた“じただみ”を探してみることにしました。  
 “じただみ”というのは、ニシキウズガイ科のオオコシダカカンガラ、コシダカカンガラ、クボガイ、ヘソアキクボガイなどの磯に住む2〜3cm程の巻貝の呼び名です。塩茹でにし、針でそつと中身をすくうように取り出して食べてみると、少し苦味がしますが、コリコリとした食感で磯の香りがして、とても美味しくいただけます。  
 この日は、波が静かで、透明度が高くすぐに見つけることができました。